

# 1.イングリッシュアドベンチャー事業の推進

## (1)趣旨

2020年度の小学校新学習指導要領の本格実施に向け、国立の教育機関として、教育内容の改善と充実を目指し「イングリッシュアドベンチャー」を実施する。

昨今の保護者の英語教育に対する関心やニーズは高く、新学習指導要領の内容をプログラムに取り入れながら、英語をコミュニケーションツールとして位置づけ、小学生の体験活動を推進する一助とする。

## (2)実施概要

**1回目**  
日程：7月21日(土)～22日(日)1泊2日  
対象：6年生 募集20名(応募総数30名)  
参加者：23名(男子11名、女子12名)  
内訳：群馬県19名、埼玉県3名、新潟県1名

**2回目**  
日程：9月15日(土)～16日(日)1泊2日  
対象：4年生 募集20名(応募総数45名)  
参加者：23名(男子12名、女子11名)  
内訳：群馬県23名

**3回目**  
日程：11月24日(土)～25日(日)1泊2日  
対象：5年生 募集20名(応募総数37名)  
参加者：23名(男子11名、女子12名)  
内訳：群馬県21名、東京都1名、茨城県1名



## (3)推進委員会の概要

イングリッシュアドベンチャー事業の推進にあたっては、推進委員会を設置した。英語教育活動についての助言は、上原教授、浜田氏から、社会教育活動についての助言は、渡邊課長から意見を頂くこととした。

事業の実施内容・事業講師の選定・評価方法・普及方法等について各委員より、アドバイスを頂いた。

### ①委員の構成

委員長：国立赤城青少年交流の家所長 松村 純子  
委員：群馬大学教育学部教授(英語科) 上原 景子  
前橋市教育委員会青少年課長 渡邊 隆志  
(株)学研プラス 文教事業室 浜田 麻由子

### ②委員会の日程と議事内容

#### 第1回推進委員会 6月22日(金)

(事業の経緯・推進委員の役割)

##### 内容

##### ■イングリッシュアドベンチャー事業全体について

- 高学年外国語科では、4技能を扱う(「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」)。「話すこと」は2つ(やり取り・発表)に分かれる。その中で特に「やり取り」を重視することが大切。
- 相手が理解しやすいように、実物を使い、ジェスチャーを交えることで伝え合う活動が行われるとよい。
- 「間違いを恐れずにやってみる」というスタンスが大切。
- 学校との違いを出す方向性については、ワイルドな体験をさせることや、「Hi, friends!」を駆使する場面(使えるような場面)を考えていけばよい。その際、既習であるトピックスを探しておくことに留意したい。
- 学校でも活用できるような活動にするとよい。
- 英語の知識や技能を習得するには、英語を用いた体験活動(ピザ作り等)にすることが大切である。

##### ■評価方法について

- 振り返りシートを用いた自己評価や、参加者同士のフィードバックによる他者評価を行うとよい。



- 子供の変容について、保護者からも評価を取るとよい。
- 子供の前後観察をする上では、ビデオ撮影を用いて、変容を見とっていくとよい。

##### ■普及について

- どこの施設でも活用できるように、活動を盛り込みすぎず、ゆとりを持ったシンプルなプログラムにするとよい。

#### 第2回推進委員会 10月25日(木)

(事業実施内容の報告・次回の事業の検討)

##### 内容

##### ■第1回及び、第2回イングリッシュアドベンチャー事業について

- 子供達が本当に困っているときには、日本語でサポートできるような外国人講師であった方がよかった。
- ピクチャーカードを用いて、子供達の目に触れさせることで、覚えたワードやセンテンスが多かった。
- 第2回の買い物ゲームに競争という要素を入れることで、より英語を使わなくてはいけない状況になり、積極的に学ばなくてはならない状況になった。
- ひとりずつ発表する場面を設定するなど、英語をしゃべれない子が表に出る機会をつくる必要がある。
- 保護者も交えてやり取りをしたのは大正解であった。
- 1回目も2回目も保護者とのやり取りがとてもよかった。保護者の方々も慣れないながらも英語でしゃべり、その頑張りを見ても子供達も見て、自分達も頑張っていた。
- フラッシュカードに絵と英単語を一緒に載せておき、英単語が自然に目に入るようにするとよい。

##### ■第3回イングリッシュアドベンチャー事業について

- 子供達同士が英語でやり取りをする活動を重視するとよい。
- 保護者の参加を大切にするとよい。
- 食べ物を扱う場合は、カタカナ英語が多くなるので、正しい発音ができるようにしていくことが大切である。
- 施設で実施している体験活動を取り入れると、学校

- 教育との違いが出せてよい。
- 2日目の英語活動の中に、昼食のビュッフェメニューを入れるとよい。
- メニューをピクチャーカードにして、1人ひとつトレイを渡して、自分の食べたいランチを作るようにすると、実際にやってみることにつながる。

##### ■普及について

- 事業を普及するには、報告書を配布することも普及の一つであるが、本事業内容を活用して貰うためにも、報告書について説明できる機会をもつことが大切である。
- 報告書はALTの意見も英語で書いてもらうとよい。

#### 第3回推進委員会 1月24日(木)

(事業実施内容の報告・報告書の検討)

##### 内容

##### ■第3回イングリッシュアドベンチャー事業について

- 子供の英語力の実態に応じてワークシートを使用するなど、個に応じた工夫が見られた。
- 2日目の英語活動で、前回よりも保護者の積極性が見られた。
- 事前に講師同士で店員とお客のやりとりのデモンストレーションを行うことで、安心して子供達が活動に取り組めるように、工夫がされていた。
- 当日のランチメニューを英語活動に取り入れることで、活動への動機付けができた。

##### ■普及について

- 全国の青少年教育施設へ報告書を送り、普及を図る。
- 推進委員の所属する大学で学生に配布し、授業に活用する。
- 教育委員会等への説明の機会を設け、普及していくとよい。

